シリーズ
お互いの力でまちづくり⑬

日本ふるさと塾主宰・萩原茂裕

7日連続の「まちづくり教室」㊤

意識改革に大きな成果

町民の大半が講演会に参加

兵庫県の北端に香住町という、人口1万5千人の町があります。日本海を臨む、風光明美なところで、古くから漁業、とりわけカニの名産地として知られています。

しかし、近年、カニも捕れなくなってきたため、カニ漁も昔ほどふるわなくなりました。このままでは、まちに活気がなくなってしまう。何とかしなければと、まちの有志たちが考えました。

そこで、〝ふるさと創生事業推進委員会〟がつくられ、その第一歩として、「ふるさと香住塾」を開設しようということになりました。

〝まちづくりは人づくり〟を合言葉に、あくまで住民ベースで、まちづくりの活動をする人材を育てようというものです。

そのためには、町民すべてが、まちづくりについて〝同じ土俵〟に上がることが大切だという巡回講演会が、この夏、香住町の各所で開かれました。その講師として、私が参加したのです。

一日に3回の現場を回る

7月1日から7日間、香住町の町内十数か所の会場で講演会が開かれました。

各地域の人たちや老人会、婦人会、町内の小学6年生、中学生、そしてPTAのお母さんたちなど、幅広い年齢層の人が、私たちの話に熱心に耳を傾けてくださいました。

とにかく町民の大半が講演を聴いて、まちづくりへの意識を高めようというのですから、それは画期的なことでした。

1回の講演が約3時間、午前9時にスタートして、一日に2つないし3つ会場を回りました。夜の講演を終えると午後11時近くという日程を、汗だくでやりぬきました。

途中でぶっ倒れるのではないかと思いましたが、それをやり遂げられたのは、このまちの人々の、みんなで一つの土俵に上がろうという率直な熱意に動かされたからでした。

心の角度を変えて まちを眺める

私の話を聴いた、たくさんの方たちから、

「まちづくりというのは、道路や建物を造ることばかり思っていたけれど、そうじゃないんだ。それよりも心の角度を変えてまちを眺めてみることなんですね。」

といわれたときには、思わず、このまちに来てよかったなと、胸の内で拍手をしたほどでした。

自分の住んでいるところが嫌いな人がたくさんいるまちに、どれだけお金をつぎ込んでも、まちはよくなりません。私はこういいました。

「まちには個性が必要なんですよ。このまちは、あなた方の先祖が素晴らしい名前をつけてくれた。

香住――香りが住むまちじゃないですか。香りがただよう木や花を植えて、植物園でも造ったらどうでしょう」

町民のみなさんの目が、輝きました。

中学生も聞き入った引地ユリさんの講演